

のか。

シベリア抑留体験記

山口県 小曾根 三郎

生い立ち

長崎市小曾根町の本籍地で、大正十(一九二二)年二月十三日に生まれました。

長崎では旧家で、比較的裕福な家庭環境で過ごしました。

県立長崎中学校を昭和十三(一九三八)年に卒業し、昭和十五年に旧制佐賀高等学校に入学、十八年に同校を卒業し、同年九月、九州帝国大学工学部航空工学科に入学しました。

しかし、学制改革によって学徒動員の対象者となり、本籍地が長崎市のため、大村四十八連隊に入営、同年十一月に、満州国牡丹江省東寧村にあった国境守備隊の重機関銃中隊に配属になりました。

その後、乙種幹部候補生を経て伍長に任官し、二十年五月に吉林市第五〇二部隊司令部付となり、倉庫班長を務めました。

二十年八月九日、司令部は出動し、留守部隊倉庫班班長、八月十五日、司令部倉庫内で終戦の詔勅を聞きました。

八月下旬、本隊は敗走状態で復帰し、九月上旬、ソ連軍進攻と共に無抵抗で降伏し、武装解脫を受け、司令部を明け渡し、ソ連軍の指揮下に入り、千人単位に部隊を再編し、天幕野営に入りました。

当時、司令部通訳からの通達によれば、日本軍は、不穏な動きがなければ、順次、帰還船により日本に送還するということでした。ソ連の監視兵も異口同音に「ヤポンスキー・トウキョウ・ダモイ」と言っていて、既に始まっていた予定された各地の収容所宛のピストン輸送について一言も触れず、見事に言論統制がしかれていました。

スターリンは、ドイツがポツダム宣言をのみ無条件降伏をした翌日、日本軍捕虜規定を制定し、日本軍が

降伏した時点で日本軍の兵力を、ソ連復興五カ年計画の一環として労働力をその中に組み込むこととし、五月の時点で約六十万人の関東軍の労働力を受入れるように受入体制を指示していました。

だからこそ、各地の収容所の受入体制やピストン輸送の体制、ダモイとだまして輸送せよの指示が十分に準備されており、九月から十二月までの短時間に受入れが完了したのです。日本政府、関東軍司令部は、抑留された兵士の保護対策が何らないまま、ソ連に日本兵士の身柄を引渡してしまいました。これらの不始末、後始末の失態は、西ドイツの対応と比較して雲泥の差があります。

私達の場合、ヤボンスキー・ダモイにすっかり洗脳されて、上下二段の有蓋貨車十数台にギュウギュウ詰め込まれても、「なに、ウラジオまでの辛抱」と決め込んでいて、まさかスターリンの謀略にかかって、アジア地方まで数千キロも運ばれるとは思ってもいませんでした。

貨車は夜中、突然に発車しました。カンボーイが銃

を撃ち、大慌てで飛び乗りました。私達は、帰国のため貨車が用意され、当然ハルビンから日本海の方に向かっていていると思っていました。ところが、夜明けにとんきょうな声が上がりました。「汽車のケツの方から日が昇ってる」と言うのです。車内は重苦しい空気に包まれました。チチハル、満洲里と、西へ西へ進んで行きます。列車は、一日三百キロ程度進んでは停車します。止まって降りると、至る所、排泄物だらけです。何回も輸送列車が通った跡です。もう、シベリア各地に用意された収容所に向かって日本兵が送られていくことが分かりました。

突然停車、突然発車を繰り返して、二週間くらいかかってバイカル湖畔に出ました。さらに二週間くらいでノボシビルスクに着きました。ノボシビルスクは日本では名古屋に当たる百万都市で、アフガニスタンなどへの分岐点です。ここからその分岐線に乗って二百キロほど南下し、さらに森林鉄道に入って、その終点の駅ビースクに着いたのは十月下旬、零下約二〇度にも冷えた夜でした。

それまでソ連の囚人の収容所だったと思われる半地下式の穴蔵で生活を始めることになりました。今までの貨車生活に比べればましでしたが、それでも二段重ねの蚕棚みたいな柵に、頭と足を互い違いに押し込んで寝るのです。

午前六時、まだ暗闇朝、レールの切れっぱしを叩く音がカーンと響きます。高粱粥の「飯上げ（食事運搬開始）」です。万国捕虜規定で、捕虜一人に支給される一日分の食料は二千四百キロカロリーと決まっています。横流しが常習のこの国では、約千五百キロカロリーに目減りしていました。ちょうど学校給食量が一日分の支給量に当たります。

パンは黒パンで、ふすまだらけで腐敗臭があつて、今の私達ならとても食べられた代物ではないのですが、飢えきつた私達にとっては大切な命の糧でした。

約二キログラムの黒パンを八人で分けるのですが、大体八等分に切り分けて、手製の秤はかりを使って切れはしで調節した上、くじ引きで分配します。

食い入るようにつめる目、目、目、わずか数グラ

ムの差に一喜一憂したものです。

ソ連では、全ての労働にノルマが課せられます。ノルマというのは、基準労働量の意味です。体が丈夫な人で、サボりさえしなければ難しくない量です。でも、体の具合が悪い人、手足が不自由な人、病気の人などは、熱が高いとか、はれ上がっているとか、はっきり証明するものがないと、ヨードチンキを塗ったりして働かせます。それで規定のノルマが果たせないとい減食になります。減食で体が弱り、日に日に消耗してゆき、気温が零下数十度の寒さで、昭和二十年の冬には倒れる人が毎日出るようになりました。

体がうんと弱って下痢を起こすと、胃腸の栄養吸収機能が失われ、顔はムーンフェイスにはれ上がり、体は、骨の上に皮が張りついた、理科教室の骸骨標本とそっくりになり、数日のうちに脱水症状で死んでゆきます。

入ソしたとき千人だった部隊が、翌年の春までに三百人死んで、七百人になっていました。二日で三人亡くなる割合になります。しかし、そんな極限状態にな

りますと、生きているのと死んでいるのとの境目になつて、ボーッととなり、悲惨とか絶望とかの感情はわきません。「次は俺かな」とかすかに思うくらいです。

日に日に餓死する人が出ますが、労働のある日は休めませんから、裸にして収容所の片隅に置いておき、零下四〇度を超えて労働休になつたとき、死体をまともてソリに積んで白樺林の凹地に運んでゆき、凍つた大地の上に積み上げて帰ります。

「カラン」と乾いた音が、苦勞を共にした戦友との別れの音です。

私達は監視兵に「お経をあげさせてくれ」と頼みましたが、監視兵はベツとつばを吐いて認めてくれません。

なぜかと言うと、ソ連では唯物主義で、「宗教はアヘンである」として、ロシア教会なども牧師を追放し倉庫にしていくらしいです。物でしかない死骸に、涙を流したり拜んだりして何になるという思想です。

シベリアの広大な大地に点々とある数百の日本人抑留者の収容所跡に何万という墓があり、何の墓標もな

く、目印さえなく、今でもソンドラの中に眠っているのです。

私の母は若いとき、腎臓を悪くし、その治療のため手のひら療法の会に入り、奥伝をもらうまで修業しました。患者と向き合つて座れば患部の状態が分かるとか、遠方にいる人に念波を送つて治療するとか、かなり靈的な能力の持ち主でした。

私は理科系の男で、ラジオはダイヤルを調整すれば音声が出るとは知っていましたが、生身の体から体へと念力が通じるとは信じていませんでした。

しかし強制的にせよ、生命の極限まで肉体的要素がそぎ落とされ、切々たる望郷、母への思慕の念が夢となって抜け出し、故郷の夕食の団らんの中に加わっていました。そして日常的な会話を交わし、「アー美味しかった」とスーと帰る、そんな感じでした。翌朝、不思議に元気が出たのです。

私は、夢によって命拾いをした後、どんなことがあつても生きて日本に帰ろう、と心に決めました。そして「帰ろう会」を結成しました。

結成したと言っても、下手に会則を作ったり、公然と呼びかけたりしたら、いつ密告され、政治犯として摘発され、十年以上の刑を受けることは免れません。とにかく仲間と、労働をカサ上げして表現し、ノルマ制度のウラをかき各人の体力を残すか、生命がけでサボりました。

半年くらいは成功しました。だんだんつじつまが合わなくなり、通告され、二十二年の大晦日の夜、営倉に放り込まれました。零下三〇度の厳寒の夜、冷え切った営倉に放り込まれ、私は凍死を覚悟しました。しかし、真夜中に人の気配がして、ペーチカに火が入りました。見つかったら殺されるのに決死の覚悟で火を入れてくれた人に、今でも感謝しています。

約一週間、クソ柱処理の刑に服しました。毎年十月、地面が凍り出す前に、収容所の横に幅三メートル、長さ七メートル、深さ二メートルくらいの穴を掘り、その穴に板を渡し、柱と柱の間を二十センチくらいあけて用を足すように便所を作っておきます。冬の間は地面がかたく凍って、穴が掘れないからです。

冬に入ると、その板の間で用を足します。便は落下して凍り、秋芳洞の石筍みたいに積もり、一カ月もすると板につかえるようになります。

「反動」である罪人の私は、そのクソ柱をバールで突いたり叩いたりして砕くのです。そのとき、飛びはねたかけらが顔に当たったり口に飛び込んだりします。零下三〇度の世界では匂いがないのですが、摂氏二〇度の部屋に入り、ペーチカのそばに寄ると猛烈に匂いを出します。「臭い」「あっちへ行け」と言われても、じっと耐える以外ありません。「婦ろう会」の頭目であるのも辛いことでした。

第一回の点呼で残留が決まった三十五人は、バルナウルという町の収容所に移されました。皆、軍幹部、満州国警察官、満州国幹部、満鉄幹部、財閥、富豪、陸士、海兵関係者が主に集められ、六百人ぐらいでした。

ここでは労働強制は割合に緩やかで、六月に入ると急に昼間の気温が三〇度を超え、春、夏、秋の季節が一度に訪れて、植物も動物も昆虫も忙しく活発化する

時期に入り、私達もアカザや野草を捕食して体力も回復して、病人も減り、死者も月一人くらいまでに減りました。

そのかわり、前身が特殊な人の集まりでしたから、毎月のように、ヨーロッパ系金髪・長身・青い目で、目つきの鋭い将校がやって来て、各人の身上のあぶり出しをやって、記録して行きます。私はなぜか「富豪と陸士出身」ということになっていて、そうでないと何度修正を申し出ても、全く受け付けてくれません。それどころか、「態度が反抗的」と書き加えられる有様。とうとう閉口して「財閥の子で士官学校出身」としてサインしてしまいました。

バルナウルは鉄道分岐点なので、帰国列車が次々に通る様子は伝わってきますが、私達の収容所には無縁で、この年は一人の転出もありませんでした。書類の厚みは増してゆくし、帰国につながる情報はないというので、「帰国ノイローゼ」になって自殺する人も出るほどでした。

二十三年六月、突然点呼があつて、思いがけず私の

名前が呼ばれました。それまではほとんど毎月、例の金髪、青い目、鋭い目つきの政治部将校の取り調べがあり、かなりの厚さの調査書綴りがあつたのに、なぜか四月、五月、その陰険な顔を見ることがありませんでした。

私はほとんど帰国をあきらめていたのに、突然の点呼で帰国組に入れられました。帰国列車に乗り込むまでも乗り込んでからも、いつ青い目が現れてつかまるか、気が気ではありませんでした。皆がうきうきと故郷料理の自慢をしたりしている中で、森林地帯、草原地帯、輝くばかりの夏のシベリア列車の寝台でつかまった夢を見て、汗びっしょりかいたりしてしまいました。

少し安心したのは、バイカル湖を越えて北シベリア鉄道に入ってソ連兵士が現れましたが、全く敵意はなく、「東京ダモイ、ハラショー」と言ったときからです。そのときに列車の行き先がナホトカと分かり、歓声が上がりました。

アムール河沿いにハバロフスクへ、さらにウスリー

江沿いに南下してナホトカに六月下旬に着きました。

ナホトカ港は晴天でした。白い船体に赤十字マークをつけた病院船「高砂丸」が見えます。皆、ほえるような声を出し、船を見つめます。あれに乗って帰れるんだ、と思いました。

しかし、下車して点呼があって、病人など数十人が残り、大多数は列車に再乗車です。目の前に船がいて、それに乗れない歯がゆさ、もどかしさ。

私達は、もだえました。特に私は、青い目の政治部将校の恐怖がついて回るのです。

列車は、極東の中心都市、ハバロフスクに返送されました。ここで一年間、みっちり洗脳教育を受けました。

青い目の政治部将校につかまった夢は何回も見ましたが、幸いに二十四年の六月、再びナホトカに送られました。

私も、この一年間で見事に、帝国主義アメリカ型の資本が支配するオキュパイドジャパンに、光栄あるソ同盟の民主政治を導入する指導者の一員に、見かけ上

は変身していました。

ここの波止場で、スターリンに対する感謝状の贈呈式その他の式典が済み、アクティブの演説が行われ、乗船者名が読み上げられました。私の名前が読み上げられたとき、私をこの四年間縛りつけていた青い目の恐怖から解放されたのを感じ、腰が抜けそうになりました。

それまでも楽団がソ連の労働歌を流していたのですが、そのとき初めてその音が快く響きました。

乗船した船は、一年前に見た真つ白でスマートな「高砂丸」と違い、真つ黒で不格好な貨物線を改造した「第二大和丸」でした。

船内に入って人員点呼が済み、船内放送があり、今の日本の状態は「日本新聞」で紹介されたような、米軍占領下で民衆がひどく苦しんでいるのではなく、日本の諸産業もかなり復興しつつあって、個人生活の自由も保障されていることを知りました。

甲板が上がったら、船員同士、何か大声で話しています。ナホトカ湾を後に船がスピードを上げ始めてい

るところでした。

船員に強い九州なまりがあり、それも長崎弁のイントネーションです。私は、その船員のところに走り寄って話しかけました。諫早市出身の青年でした。その青年に、四年の間耐えていたソ連の悪口を喋り続けました。これほどの解放感には、長い間味わえなかったものでした。

そのとき、ふいに後ろから肩を叩かれました。「同志小曾根、大分熱中してソ同盟の批判をしているようだが、今夜八時から、同志小曾根の批判会を行う」と。「シマッタ」と思いましたが、日本の船の中だと思い「いいですよ」と答えました。

このリバティー型の輸送船は、船底に櫓を立てて、その上に吊し上げの被告を立てると、一種の舞台効果があります。アクティブ達にとって、最後の見せ場になるのです。

被告である私が、櫓の上に立ちます。アクティブが、シベリアで何回もやってきた慣れた口調で、「同志小曾根が、本日、船員に対し、光栄あるソ同盟の民

衆を誹謗するプロパガンダ行為を同志の前に披露す

る」と前置きして、「ソ連人民は知能程度が低い、手くせが悪くカッパライが多い、日本人を日本に帰すといいながら四年も強制労働させた、ソ連軍は悪い食料事情の中で無理なノルマを強制した、今のスターリンのやり方はツァー時代から引き継いだ暗黒政治であり、密告奨励の恐怖政治であると批判していた。全くのはずれの暴言に外ならない、反動小曾根は明らかに日本軍国主義者、米國資本主義者の手先であり、彼自身がブルジョアの家庭であり、これから反共プロパガンダの先頭に立つ者である、同志諸君、我々はこれから日本に上陸し、代々木の共産党本部に乗り込み、これと提携して日本の真の民主化政府を打ち立てようとする我々同志に対する宣戦布告である……。」

そのとき、緊急動議が出て「こんな奴は日本海に叩き込め」と言う声が上がりましたが、船長を初め船内の良識派からの制止で流会になりました。私は、捕虜の中の捕虜として監視下に置かれることになりました。

八月十五日、盆で賑わう舞鶴港に入港し、復員手続きを済ませ、復員手当四千円を支給され、これで四年か五年は暮らせると思ったのですが、学徒出陣のときの十円程度とアンパンを買って無理だと分かりました。

四日後、舞鶴発正午の復員列車に乗り込みましたが、捕虜集団の中の捕虜となった反動の私は、ちょうどこの日、京都駅で国鉄組合が五万人首切り反対ストを行なっていて、帰省列車の集団がその応援に京都駅に座り込みを決め下車したので逃げ出すことができず、列車出発が夜中になり、郷里で家中で待っていてくれた人達に大きな迷惑をかけました。

学徒で大学在籍のまま出陣した私は、昭和二十四年八月、二十八歳で復学し、大学に三年お世話になり、三十一歳で名誉卒業をさせてもらいました。

花の青春、二十代を失いましたが、八十歳まで戦友の分まで生かさせていただき、感謝いたしております。

遙かなるシベリア 煉獄れんごくの青春

静岡県 今泉 茂

激動の世紀と言われ、目まぐるしい変転を重ねた二十世紀は、その終末間際にソ連の内部崩壊という大変動に直面した。それはロシア革命以来七十四年続いた社会主義体制の自己否定であった。スターリン体制下シベリアに抑留され、強制労働に従事したわたしには、ひとしお感慨深いものがある。シベリア長期抑留の不当性についてマスコミはほとんど取り上げず、日本史の教科書も日本将兵のシベリア抑留には長い間触れなかった。触れたのは（注1）昭和も終わりに近くなってからであった。ロシア共和国初代大統領エリツィンは、訪日した際、シベリア抑留について公式に遺憾の意を表明した。シベリア抑留問題は今や決着した史実として記録され、黒白は明白となった。抑留体験者の一人として、半世紀を越える歳月の中で風化する